



SPRING わきあがる鼓動

出品作家 ※出品順

■大巻伸嗣 ／ Ohmaki Shinji 1971 —

「存在」や「生命の循環」をテーマに掲げ、シャボン玉や光、水面といった儚い素材や自然現象を駆使し、鑑賞者の身体感覚に直接訴えかける体験を創出する。代表作に「ECHO」や「Liminal Air」シリーズなど。

■初代歌川広重 ／ Utagawa Hiroshige I 1797 — 1858

江戸の武家出身で役者絵、美人画を始めるが、「東海道五十三次之内」により風景画家として名を広める。四季折々の風土と人々の生活の営みを詩情豊かに描き、名所絵の名手として活躍した。

■初代歌川国貞 ／ Utagawa Kunisada I 1786 — 1864

歌川豊国の門人で、初代豊国の歿後に三代歌川豊国となる。美人風俗画と役者絵に卓越した技量を發揮する。師、豊国を支えて豊国一派を最盛に導いた。

■五雲亭貞秀 ／ Gountei Sadahide 1807 — 1878 ?

歌川国貞の門人。地理に強い関心を持ち、精密な鳥瞰式の一覧図で知られる。横浜、箱根など各地の風景画において高い評価を得た。1967年のパリ万国博覧会に出品する際に浮世絵師総代を務めた。

■平木政次 ／ Hiraki Masatsugu 1859 — 1943

五姓田義松の父、芳柳に師事。松田緑山の玄々堂に入社し、石版画を学ぶ。1889年（明治22）に明治美術会に参加。晩年には洋画界の黎明期の様相を記録した『明治初期洋画壇回顧』を執筆・出版した。

■渡辺文三郎 ／ Watanabe Bunzaburo 1853 — 1936

五姓田義松に洋画を学ぶ。義松の妹、勇子（のちの渡辺幽香）と結婚。東京英語学校の図画教師を務める。1889年（明治22）の明治美術会創設に参加。その後継となる太平洋画会の創設にも加わった。

■チャールズ・ワーグマン ／ Charles Wirgman 1832 — 1891

絵入り週刊新聞『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の特派員として1861年に来日。横浜居留地に住む。翌年、風刺漫画誌「ジャパン・パンチ」を創刊。五姓田義松や高橋由一に洋画を教えた。

■アルフレッド・イースト ／ Alfred East 1844 — 1913

パリのエコール・デ・ボザールとアカデミー・ジュリアンに学ぶ。バルビゾンやグレー村を訪れ、芸術家コロニーで過ごした。1889年（明治22）に来日し、6ヶ月ほど滞在。明治美術会で講演も行った。

■コンスタンス・フレデリカ・ゴードン＝カミング ／ Constance Frederica Gordon-Cumming 1837 — 1924

英国の探検家、作家、画家。1860年代後半からアジア・太平洋の諸地域を旅行し、日本には1870年代後半に滞在。富士山の登頂に成功する。旅行中には紀行文を書き、風景画も旺盛に制作した。

■ウォルター・フェイン ／ Walter Fane 1828 — 1885

英領インド陸軍の少将。1857年から翌年にかけてインドを席捲したセポイの反乱では、反乱軍の名将タンティア・トーペと戦うなど、軍人として数々の功績を残しつつ、画家としても活躍した。

■フランク・ベレスフォード ／ Frank Ernest Beresford 1881 — 1969

英国の画家。王立アカデミーを中心に内外の展覧会で作品を発表。日本や南アフリカをはじめ、世界各地を旅行しながら制作を続けた。第二次世界大戦では王立軍と米国陸軍航空軍の従軍画家となった。

■杉本博司 ／ Sugimoto Hiroshi 1948 —

写真を芸術の域に高めた現代美術家として国際的に高い評価を受ける。代表作に、世界中の劇場で長時間露光によりスクリーンを白く写した「劇場」シリーズや、水平線を写し撮った「海景」シリーズなどがある。

■二代歌川広重 ／ Utagawa Hiroshige II 1826 — 1869

武家の出身で二十歳の頃に作画活動を始める。初代広重の画風を継ぎ、諸国の抒情豊かな名所絵や花鳥画を得意とした。晩年には横浜に拠点を移し、異国船や外国人が登場する横浜絵を多く残した。

■二代歌川国貞 ／ Utagawa Kunisada II 1823 — 1880

はじめ国政を名乗るが初代国貞（三代豊国）の娘婿となって国貞の名を継ぎ、その後、豊國の名も継いだ（四代豊国）。版本の挿絵や役者絵、美人画で活躍する。

■豊原国周 ／ Toyohara Kunichika 1835 — 1900

迫力のある役者絵の第一人者として人気を博し、「明治の写楽」と称された。あざやかな色彩を用いた群像図も得意とし、流行の服飾の華麗な美人画も好評を得た。

■五姓田義松 ／ Goseda Yoshimatsu 1828 — 1888

チャールズ・ワーグマンに洋画を学ぶ。工部美術学校では絵画教師のアントニオ・フォンタネージに師事した。1880年（明治13）に渡欧し、レオン・ボナに師事、日本人として初めてサロンに入選した。

■中澤弘光 ／ Nakazawa Hiromitsu 1874 — 1964

東京美術学校で黒田清輝に師事し、白馬会創立に参加。光風会や日本水彩画会、白日会の結成にも加わる。1900（明治33）年のパリ万国博覧会に出品。その後、文展、帝展、日展で活躍した。

■歌川国輝 ／ Utagawa Kuniteru 1838 — 1880

歌川国貞の門人。初めは歌川貞重の名で子供絵、教訓絵などの淒みのある錦絵を多く描いた。国輝と改名したのちは挿絵を手がけるほか、美人画、役者絵を描き、刺青の下絵でも名を上げた。

■歌川国芳 ／ Utagawa Kuniyoshi 1797 — 1861

歌川豊国門下に入り、「通俗水滸伝豪傑百八人之一個」シリーズによって人気絵師となる。奇想天外な場面構成を得意とし、豪快な英雄像と躍動感のあるパノラマ的な構図から武者絵の国芳と讃えられた。

■歌川芳員 ／ Utagawa Yoshikazu 1827 — 1869

歌川国芳に学び武者絵や花鳥画を得意とする。好奇心が旺盛でユニークな動物画も残している。のちに異国風俗への関心を高め横浜絵の先駆者一人となった。

■歌川芳艶 ／ Utagawa Yoshitsuya 1822 — 1866

歌川国芳の門人。力強い筆法と彩色の艶麗さがその名の由来とされる。迫力ある武者絵で人気を博す。同門の歌川国輝とは良きライバルで競いあった。

■揚洲周延 ／ Yoshu Chikanobu 1838 — 1910

越後高田藩の下級藩士の家に生まれる。歌川国芳、豊原国周に師事。戊辰戦争に従軍した経験を持つ。明治期に入り、西洋画を参照した画法で文明開化の時代の風俗を丁寧に描写した。

■月岡芳年 ／ Tsukioka Yoshitoshi 1839 — 1892

歌川国芳に入門し、師匠ゆずりの画風で武者絵や美人画に取り組む一方で、世相を反映した残酷絵など、独自の路線を切り拓く。西洋の写実描写を取り入れた、迫力ある大胆な表現で人気を博した。

■歌川国政 ／ Utagawa Kunimasa 1773—1810

歌川豊国の門人となり、芝居好きが高じて役者絵に多数取り組む。優れた描写力により豪快な構図を生んだ。

■三代歌川豊国 ／ Utagawa Toyokuni III 1786—1864

歌川国貞と同一人物。初代豊国の門人で、本人は二代豊国を自称していた。浮世絵師の中でも随一の多作で知られ、美人画や役者絵、挿絵などで活躍。役者絵では容姿と所作の活写に優れていた。

■イケムラレイコ ／ Ikemura Leiko 1951—

ベルリンを拠点に絵画や陶芸、ガラスなどの立体に作品にも取り組む。少女や動物、自然をモチーフに、人間存在の根源を探求。作品はエコロジーへの意識を反映し、古代の物語に通じる普遍的な世界観を持つ。

■丸山直文 ／ Maruyama Naofumi 1965—

1990年代から一貫して絵画を制作する。水を含ませた綿布を床に置き水平な状態で作品を描く。にじみやぼかしを取り入れ、アクリル絵具のあざやかな発色とともに、豊かなイメージが湧きあがる世界を生み出している。

■パット・ステア ／ Pat Steir 1940—

ニューヨークを拠点に女性の芸術家としての問題意識をもとに活動する。抽象表現主義にみられる力強い筆触に拠らない絵画を模索し、1980年代よりキャンバスに絵具を垂らす技法で「ウォーターフォール」の連作をはじめる。

■小川待子 ／ Ogawa Machiko 1946—

陶芸家。東京、パリ、西アフリカで陶芸の制作を学ぶ。鉱物の美しさの中に「かたちはすでに在る」という考え方を見出し、陶土と釉薬との対話から、かたちの始原を追究している。

■ツェ・スーウェイ ／ Su-Mei Tse 1973—

ルクセンブルグに、イギリス人ピアニストの母と中国人バイオリニストの父との間に生まれる。東西の文明、アイデンティティをテーマに立体、写真、映像、インスタレーションを手がけ、異なるものへのユニークな視座を提示している。

■クロード・モネ ／ Claude Monet 1840—1926

印象派の画家モネは、フランス国内外の各地を旅し、鋭敏な観察眼により得られた視覚的な経験を糧に、その土地の光と大気の揺らぎを絵画に留めていった。

■フィンセント・ファン・ゴッホ ／ Vincent van Gogh 1853—1890

オランダに生まれ、パリで印象派の絵画など明るい色彩の絵画に出あう。移動と内省により制作の課題を新たにしながら、南仏アルル、そして短い生涯の晩年にはパリ郊外での制作に打ち込んだ。

■ポール・ゴーガン ／ Paul Gauguin 1848—1903

ゴーガンは生活の拠点であったパリを離れ、ブルターニュ地方の小村に素朴な美しさを見出し、南洋の島での暮らしに西欧文明の秩序や洗練とは異なる生の調和を求めた。

■ジョルジュ・スー ラ ／ Georges Seurat 1859—1891

同時代の色彩理論を絵画技法に取り入れ、絵画制作を色彩の実験として取り組み、点描技法を創出した。パリ郊外の戸外やノルマンディー地方におもむき、この技法による筆触の実験を進めた。

■ポール・シニヤック ／ Paul Signac 1863—1935

ヨットを自ら操縦し、ヨーロッパ各地の港を旅し、水辺の湿気を含んだ大気の色調、変化に富む天候への纖細な感覚を風景画に表した。スー ラが始めた点描を発展させ、まばゆい色彩の風景画を構築した。

■オディロン・ルドン ／ Odilon Redon 1840—1916

世紀末の象徴主義を代表する画家ルドンは、絵画における色彩と線描、構図法により、神話や物語、あるいは生命にまつわる豊かなイメージを喚起する力を探究した。

■青木美歌 ／ Aoki Mika 1981—2022

美術大学を卒業後、ガラスと光を用いた纖細で独創的な作品を数多く手掛けた。「生命の在りよう」をテーマに、自然界の微生物や細胞のような有機的な形状を表現する作風により、国内外で高く評価された。

■アンリ・ルソー ／ Henri Rousseau 1844—1910

税関吏の仕事に就きながら独学で絵画制作に取り組んだルソーは、生命感があふれる濃密なジャングル風景や、変わりゆく近代都市パリの風景を描き、日常とは異なる世界のヴィジョンを提示した。

■アンゼルム・キーファー ／ Anselm Kiefer 1945—

第二次世界大戦後に生まれた作家としてヨーロッパの歴史と記憶に向き合い、大地を想起させる重層的な平面や立体作品を制作している。その作品は人間の根源的なあり方に深い内省を促す。

■名和晃平 ／ Nawa Kohei 1975—

ガラスピースで物体を覆う「PixCell」シリーズをはじめ、独自の「Cell（細胞・粒）」という概念を基軸に、発泡ウレタンやシリコーンオイルなどの素材と、最先端技術を駆使した彫刻や空間表現で高い評価を得ている。